

現況分析における顕著な変化に ついての説明書

研 究

平成22年6月

神戸大学

目 次

1. 文学部・人文学研究科	1
8. 医学部・医学系研究科	3
12. 国際協力研究科	4
13. 経済経営研究所	5

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育／**研究**)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	文学部・人文学研究科
-----	------------	----------	------------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

2. 上記1における顕著な変化のあった取組及び成果の状況、その理由

○顕著な変化のあった観点名

A. 「研究成果の状況」について、学術面では以下のような顕著な成果を上げることができた。

1. 平井晶子『日本の家族とライフコース：『家』生成の歴史社会学』（ミネルヴァ書房、2008年）。本書に関して、嶋崎尚子氏（早稲田大学）は「非常に意欲的な実証研究である。…本書の分析方法やその考察は手堅いものであり、対象地域の拡大など、今後の研究展開が大いに期待される。」（『家族社会学研究』20-2、2008年）と学術的価値を評価し、家族社会学の重鎮、清水浩明氏（日本大学）も書評（『ソシオロジー』54-1、2009年）で高い評価を行っている。第12回日本人口学会賞（2010年）を受賞することが決定している。

2. 大坪庸介 Ohtsubo, Y., & Watanabe, E. (2009). Do sincere apologies need to be costly? Test of a costly signalling model of apology. *Evolution and Human Behavior*, 30(2), 114-123. 本研究は生物のコミュニケーションの分析の枠組みを、初めて人の謝罪場面に適用したもので、D. Buss 教授（テキサス大学）執筆の進化心理学の教科書の次版（第4版）で取り上げられることが決定している。また、Psychology Today のサイト上の G. Saad 博士（コンコルディア大学、カナダ）のブログでも、「効果的な謝罪の秘密」として取り上げられるなど、高い評価を受けている。

B. 「社会的貢献」の分野では、以下のような顕著な成果を上げることができた。

1. 嘉指信雄・共編著『ウラン兵器なき世界をめざして－ICBUWの挑戦－』（合同出版、2008年）。本書は、「現段階における劣化ウランをめぐる諸問題を包括的に明らかにしたもので、放射線による被害の悲惨さが実に詳しく明らかにされている」として、第14回平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞を受賞した（平成20年12月5日）。発行部数もこの種の書籍としては例外的に3000部を超え、非人道的兵器の軍縮に関する基本文献として広く認知されている。現在、168の大学・公立図書館に所蔵されている。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育／研究)

法人名

国立大学法人神戸大学

学部・研究科等名

文学部・人文学研究科

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

Ⅲ 質の向上度の判断 事例3「学術的意義の高い研究成果」(分析項目Ⅱ)

2. 上記1における顕著な変化のあった取組及び成果の状況、その理由

○顕著な変化のあった観点名

A. 「研究成果の状況」について、学術面では以下のような顕著な成果を上げることができた。

1. 平井晶子『日本の家族とライフコース：『家』生成の歴史社会学』（ミネルヴァ書房、2008年）。本書に関して、嶋崎尚子氏（早稲田大学）は「非常に意欲的な実証研究である。…本書の分析方法やその考察は手堅いものであり、対象地域の拡大など、今後の研究展開が大いに期待される。」（『家族社会学研究』20-2、2008年）と学術的価値を評価し、家族社会学の重鎮、清水浩明氏（日本大学）も書評（『ソシオロジー』54-1、2009年）で高い評価を行っている。第12回日本人口学会賞（2010年）を受賞することが決定している。

2. 大坪庸介 Ohtsubo, Y., & Watanabe, E.(2009). Do sincere apologies need to be costly? Test of a costly signalling model of apology. *Evolution and Human Behavior*, 30(2), 114-123. 本研究は生物のコミュニケーションの分析の枠組みを、初めて人の謝罪場面に適用したもので、D.Buss 教授（テキサス大学）執筆の進化心理学の教科書の次版（第4版）で取り上げられることが決定している。また、*Psychology Today* のサイト上の G.Saad 博士（コンコルディア大学、カナダ）のブログでも、「効果的な謝罪の秘密」として取り上げられるなど、高い評価を受けている。

B. 「社会的貢献」の分野では、以下のような顕著な成果を上げることができた。

1. 嘉指信雄・共編著『ウラン兵器なき世界をめざして－ICBUWの挑戦－』（合同出版、2008年）。本書は、「現段階における劣化ウランをめぐる諸問題を包括的に明らかにしたもので、放射線による被害の悲惨さが実に詳しく明らかにされている」として、第14回平和・協同ジャーナリスト基金奨励賞を受賞した（平成20年12月5日）。発行部数もこの種の書籍としては例外的に3000部を超え、非人道的兵器の軍縮に関する基本文献として広く認知されている。現在、168の大学・公立図書館に所蔵されている。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育／研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	医学部・医学研究科
-----	------------	----------	-----------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目 I 研究活動の状況

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由**○顕著な変化のあった観点名: 研究活動の実施状況**

本研究科の研究活動の状況について、以下のような顕著な変化があった。

まず、受託研究数（平成 18 年度：28 件、平成 19 年度：40 件、平成 20 年度：37 件、平成 21 年度 45 件）、共同研究（平成 18 年度：34 件、平成 19 年度：33 件、平成 20 年度 33 件、平成 21 年度 41 件）はともに、年度を追う毎に増加している。

また、がん、代謝疾患、感染症、神経・筋疾患を対象とした『次世代シグナル伝達医学の教育研究国際拠点-基礎・臨床医学実質融合による Clinician- Scientist の育成-』が平成 20 年度グローバル COE プログラム（医学系）に採択された。本研究は平成 20 年度から平成 24 年度にかけて行う。「シグナル伝達医学」は生体の恒常性を維持する情報システムから疾患を捉え、疾患メカニズム、診断、治療、予防について研究する分野である。シグナル伝達医学の進歩は個々の疾患の理解を格段に深める一方で、従来の疾患別・専門分野別のアプローチでは解明できない疾患の複雑性を浮き彫りにした。本拠点形成の目的は、本学におけるこれまでのシグナル伝達医学の成果を踏まえて、全く新しい視点とアプローチにより、疾患の病態を捉え、その本質を理解すること、革新的医療戦略を構築すること、さらに、次世代の医学・医療のリーダーとなる人材を育成することである。そのために、基礎・臨床医学の実質的な融合を基にした分野横断的・統合的なアプローチにより、社会的に根本的な解決が急務となっているがん、代謝疾患、感染症、神経・筋疾患を対象とし、それらの疾患が互いに関わり合う核心メカニズムの解明、並びに画期的な診断・治療・予防法の確立を目指すと同時に、新分野を創成する能力を有する clinician-scientist・医学研究者の育成を目指したシグナル伝達医学の教育研究国際拠点を形成することである。本計画は、基礎研究を各臨床の領域と融合させて研究を進める点、人材育成面においては、Clinician scientist 養成を目標に掲げ、医学部卒業生、研修医などが参画しやすい計画となっており、研究を志向する医学部卒業生、医師が激減している現状に鑑み、基礎と臨床の医学研究者を同一講座に配置する基礎・臨床医学融合制度を設ける試みが高く評価されたものである。補助金総額は 1,995,560,000 円の予定である。

その他、神戸大学における微生物・感染症研究グループを機能的に集約し、基礎研究と臨床研究を融合・包括した世界レベルの教育研究拠点を形成するとともに、兵庫県や神戸市等との地域連携、アジア諸国等との国際協力等、感染症対策に不可欠の活動を機能的に実施することを目的として、平成 21 年 4 月に医学部附属医学医療国際交流センターを医学研究科附属感染症センターに改組し、研究課題「フラビウイルス等に対する抗ウイルス薬及びワクチンの開発」が、平成 21 年度「地球規模課題対応国際科学技術協力事業」（科学技術振興機構）の感染症分野で採択された。この研究は、平成 21 年度から平成 25 年度にかけて行い、インドネシア特有および日本の薬用植物資源・天然抽出物を用いてフラビウイルスなど（C 型肝炎ウイルスおよびデングウイルス）に対する抗ウイルス薬のスクリーニングと作用機序の解析を行うとともに、フラビウイルスなどのエンベロープたんぱく質を発現する DNA ワクチンあるいはそれを応用した組換え水痘生ワクチンを作製し、動物実験によりウイルス中和抗体や細胞性免疫の誘導能について調べる。これらの研究をインドネシア大学、アイルランガ大学、医薬基盤研究所と共同で行い、インドネシア人研究者の日本への招へいを通して、インドネシアにおける研究技術の向上や人材育成を目指すものである。補助金総額は 34,354,000 円の予定である。

整理番号	61-12-04
------	----------

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育・研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	国際協力研究科
-----	------------	----------	---------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

2. 上記1における顕著な変化のあった取組及び成果の状況、その理由

○顕著な変化のあった観点名 研究成果の状況

研究科として、研究業績を後援会基金（海外出張、出版助成に使用可能）の配分に反映するように取り組んだ。特に、国際的な業績の促進に努めた結果、次のように国際的な業績が増加した。

国際関係論分野では、この分野におけるトップジャーナルの一つ、国際学会 International Studies Association の学会誌 International Political Sociology(業績番号1)に論文が掲載されている。

開発経済分野においてトップクラスの評価を受け、国際的に権威のある国際的なレフェリー・ジャーナルである Land Economics(研究業績2), Journal of Development Studies(業績番号3), Quarterly Review of Economics and Finance(業績番号4) に論文が掲載され、掲載時期が最近である新しい論文にもかかわらず、すでに引用されている。

政治学の分野では、レフェリー付きのスペイン語の国際雑誌、Mexico y la Cuenca del Pacifico(業績番号6) に論文が掲載されている。暫定評価時に提出した「研究科を代表する研究業績リスト」では、国際レフェリー雑誌の論文は1本であったが、今回は5本へと顕著に増加している。

それ以外にも、2009年に英語で出版された開発経済分野の共編著 Economic Transition in Myanmar after 1988: Market Economy versus State Control, NUS Press, Singapore (業績番号5) が国際雑誌 Developing Economies(Vol. 47, No. 4, December 2009)においてミャンマーを代表する経済学者 Mya Thein 氏により書評を受けており、欧米圏やミャンマー国内の既存研究にない深度と包括性を持っていると評価された。

国際法学の分野では、Ashgate 社から部分執筆をしている 2008 年に英語で出版された著書 “The Legitimate Use of Military Force” が国際雑誌 (Peter Rowe 氏 Defence & Security Analysis, Vol. 24, Issue4, December 2008, pp. 421-424, 及び Etudes Internationales, Vol40, No. 1, 2009, pp. 136-138) において書評を受け、他研究者の著書などで引用されている。開発法学の分野においては、2007 年に開かれた国際学術会議 Beijing Forum 2007 に報告された論文の中から、コーポレート・ガバナンス部門の優秀論文 (50 論文の中から 1 本選抜) として選抜され 2008 年に北京大学出版会から英語で出版されている (業績番号8)。このように、暫定評価以降、多くの分野において国際的に評価を受けた業績を多く出した。

国内においても、「国際開発研究」(国際開発学会、「日本の貧困国援助の比較論的考察—援助レジームの変遷をめぐって」2009 年)、「アジア研究」(アジア政経学会、「東南アジアのコーポレート・ファイナンスの規定構造について：タイ・マレーシアを観察事例に」2008 年)「国際法外交雑誌」(国際法学会、「環境条約不遵守手続の帰結と条約法」2008 年)「宗教研究」(日本宗教学会)などの学会の機関誌に論文が掲載され、「レヴェイアサン」(「ポピュリズムの中の歴史認識：日韓の事例を中心に」2008 年など)といったレフェリー雑誌にも論文が掲載されている。また、新聞などの主要メディアにおいて書評を受けた『韓国現代史』(中公新書、2008 年：毎日新聞、朝日新聞、日本経済新聞、読売新聞等)(業績番号9)、『民主化の韓国政治』(名古屋大学出版会、2008 年：毎日新聞、朝日新聞、論座、週刊エコノミスト等)(業績番号10)といった社会・経済・文化的意義のある著書も出版している。

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育／研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	経済経営研究所
-----	------------	----------	---------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名：研究活動の実施状況

平成 20 年度・21 年度の 2 年間に於いて、著書 11 冊（1 人当たり 0.5 冊）、学術論文は 137 本（1 人当たり 6.2 本）、内査読付は 45 本（1 人当たり 2 本）となっており、教員 1 人当たりの年平均値は既に高水準にあった中間評価時の 4 年間（平成 16～19 年度）と同水準を維持している。外部資金獲得額に関しては、総計 2 億 3 千万円を超え、教員 1 人当たり年平均約 530 万円（平成 16～19 年度は 350 万円）に上り、前回評価時よりも高水準となっている。さらに、以下の点は期待を大きく上回る顕著な成果である。

1. 2010 年度日本経済学会・中原賞受賞決定

本研究所教員が 2010 年度日本経済学会・中原賞を受賞することが昨秋決定した。日本経済学会は、経済学における国内最高峰の学会であり、中原賞は、国際的に認知される業績をあげた 45 歳未満の若手経済学者に対して与えられる最も権威ある学会賞である。今回の受賞は、評価対象期間における本研究所の研究活動の実施状況が国内最高レベルであったことを客観的に示し、関係者の期待を大きく上回る顕著な変化であると考えられる。

2. 2010 年度日本経済学会・石川賞受賞決定

本研究所教員が 2010 年度日本経済学会・石川賞を受賞することが昨秋決定した。石川賞は、実証面や政策面を中心に、日本の経済・社会問題の解決に貢献する優れた経済学研究を行った 50 歳未満の研究者に贈られる、日本経済学会において中原賞と双璧をなす学会賞である。今回の受賞は、評価対象期間における本研究所の研究活動の実施状況が国内最高レベルであったことを客観的に示し、関係者の期待を大きく上回る顕著な変化であると考えられる。

3. 過去に例のない同時受賞

一大学が中原賞・石川賞を同時受賞した例は過去になく、今回本研究所が同時受賞を果たしたことは、本研究所の研究活動の実施状況が国内最高峰であることを客観的に示している。これは明らかに関係者の期待を大きく上回る顕著な変化である。

4. 日本銀行審議委員に指名を受ける

上記の日本経済学会・石川賞受賞者が、政府より日本銀行審議委員の指名を受け、平成 21 年度末に就任した。これは、政策研究ワークショップ・金融研究会を中心とした本研究所における金融政策研究の活動実施状況が国内最高レベルであったことを客観的に示すものであり、関係者の期待を大きく上回る顕著な変化であると考えられる。

<根拠資料>

日本経済学会ホームページ：<http://www.jeaweb.org/jp/general-Info/index.html>

日本銀行・記者会見：<http://www.boj.or.jp/type/press/kaiken07/index.htm>

現況分析における顕著な変化についての説明書(教育／研究)

法人名	国立大学法人神戸大学	学部・研究科等名	経済経営研究所
-----	------------	----------	---------

1. 分析項目名又は質の向上度の事例名

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

2. 上記1における顕著な変化の状況及びその理由

○顕著な変化のあった観点名：研究成果の状況

1. 2010 年度日本経済学会・中原賞受賞決定（業績番号 1）

本研究所教員が 2010 年度日本経済学会・中原賞を受賞することが昨秋決定した。日本経済学会は、経済学における国内最高峰の学会であり、中原賞は、国際的に認知される業績をあげた 45 歳未満の若手経済学者に対して与えられる最も権威ある学会賞である。今回の受賞は、本研究所教員による経済動学理論に関する国際的業績が高く評価された結果である。これは、評価対象期間における本研究所の研究成果に対する客観的な評価であり、関係者の期待を大きく上回る顕著な変化であると考えられる。

2. 2010 年度日本経済学会・石川賞受賞決定（業績番号 2）

本研究所教員が 2010 年度日本経済学会・石川賞を受賞することが昨秋決定した。石川賞は、実証面や政策面を中心に、日本の経済・社会問題の解決に貢献する優れた経済学研究を行った 50 歳未満の研究者に贈られる、日本経済学会において中原賞と双璧をなす学会賞である。今回の受賞は、本研究所教員によるマクロ金融政策分析に関する業績が高く評価された結果である。これは、評価対象期間における本研究所の研究成果に対する客観的な評価であり、関係者の期待を大きく上回る顕著な変化であると考えられる。

3. 過去に例のない同時受賞（業績番号 1、2）

一大学が中原賞・石川賞を同時受賞した例は過去に無く、今回本研究所が同時受賞を果たしたことは、評価対象期間における本研究所の研究成果が国内最高峰であることを客観的に示している。これは明らかに関係者の期待を大きく上回る顕著な変化である。

4. 日本銀行審議委員に指名を受ける（業績番号 2）

上記の日本経済学会・石川賞受賞者が、政府より日本銀行審議委員の指名を受け、平成 21 年度末に就任した。これは、政策研究ワークショップ・金融研究会を中心とした本研究所における金融政策研究の成果が国内最高レベルであったことを客観的に示すものであり、関係者の期待を大きく上回る顕著な変化であると考えられる。

<根拠資料>

日本経済学会ホームページ：<http://www.jeaweb.org/jp/general-Info/index.html>

日本銀行・記者会見：<http://www.boj.or.jp/type/press/kaiken07/index.htm>